

翻訳者からの応答

江川 温

最初に何か言い訳をするというのが流行しておりますけれども、私は中世史で、谷川さんの問題意識を最も理解していない翻訳者の一人でありまして、しかもここに今日テキストとして配られた冊子、というか刊行される予定の全体でも、翻訳は1つしか出しておりませんし、ノラの書いた物についてももちろん体系的に読んでいるわけではありません。この書物におさめた諸論考も現在のところさほど目を通してあるわけではありません。そういうわけで控えめに隠れておるつもりだったのが、昨日何かコメントをせよという命令を受けまして、事情を説明しましたが、なかなか免除してもらえず、パニックに陥っております。

私自身としては、日本史研究者の方々のコメントにまともには答えられません。ただ日本史の方々のコメントに触発されて、私からこういうことではないかなということを少し述べさせていただいて、それで許していただけたらと思っています。日本史でも集合的記憶の問題がいろいろ取り上げられるようになってきておって、そこでの問題意識を生かした形で、諸先生からコメントをなされていると思うのですが、私は生産的な比較のためには、そもそも現在の歴史学でなぜ記憶ということが問題にされるようになったかということを掘り下げて検討する必要があると思いますし、そこには

現代世界において歴史学が共通に抱えている条件と、各国の歴史学が以前から引きずっている固有の条件が共に存在するのではないかと、両方があるのではないかと考えております。そのことはちょっとあとで補足して説明しますが、ノラが言うような意味での記憶の場が歴史学の問題になるということ、あるいはより広く言って歴史事象にまつわる記憶が、それ自体学問研究の対象になるということについては、ノラはおもにフランスの社会状況や政治状況、あるいは思想状況に基づいて説明している、それに過ぎないと言いますか、そういうことであります。彼の説明は全体として、あまりすっきりと理解できません。この点をご指摘のとおりです。なぜすっきりと理解できないかというと、記憶という言葉が何重もの意味を負わされて使われているということ、それから歴史および記憶の変化の要因として、1世紀以上に渡るような長期的な条件と短期的な条件がアトランダムに持ち出されていることが説明をわかりにくくしている原因だろうと思います。ただそういうことはあるのですけれど、彼が何を言っているのかをまず理解しないといけないと思うんです。これは岩崎先生と安丸先生のコメントに関わることですけれど、記憶と歴史ということで彼は2つの段階を区別しているだろうと思います。第1の段階というのは、記憶、これは「手

46 翻訳者からの応答

の加えられていない記憶」とか、「真の記憶」とかそういう言い方で彼が呼ぶところのものです、それと伝統的な歴史の対立です。伝統的な歴史とは何かというと、それは党派や地域や国民、そういう共同体が特定の目標に沿って記憶を選別し、編集することによって作り出す記憶であります。伝統的な歴史がそここのところ、で記憶という名前を名乗るということになっておるわけですね。これが第1段階だろうと思うんです。第2段階では、新しい歴史と言いますか、歴史が歴史的言説自体を批判的に検討するという段階がある。もちろん伝統的な歴史が生み出してきた言説を批判的に検討する。この段階で歴史と記憶との間に対立関係があったのだということが暴露される、こういう構造になっていると思います。それ以前はその対立関係は見えない、いわば編集されたものがそれ自体記憶だと名乗り、人々がそれを変だと思われるかもしれないけれども受け入れてしまうという、そういうところがある。2段階になっていると思います。そうすると、安丸先生が指摘されていることは、2つの段階の話が混在していないかなという印象を、ちょっと私は受けます。つまり「国民化された現在の記憶は、個別の経験や記憶の置き換え、忘却、隠蔽などであり」それはそのとおりなんです、が、「歴史はそうした過程を暴露的に捉えるものである」と、こういうふうに言われたときの歴史は多分新しい歴史なんだと思います。ところが「記憶と歴史が同義どころか、あらゆる点で相反する」とい

うときには、この2つの段階を通じた議論をしているのだらうと思うんですね。「記憶のなかに国民的通念となっている現在の記憶とかつて存在した記憶との間に大きな違いがあり」ということですが、それでも、「国民的通念となっている現在の記憶」というのは結局は国民史ということ。国民史と、かつて存在した記憶、これがノラの言う「真の記憶」とか「手付かずの記憶」というものに当たるのでしょうか、それとの間に大きな違いがあることはこの書物のいわば前提になっているのではないかなと思います。

それからこの書物が、一応そういう論理になっているということで、岩崎先生の出した問題に突き当たるわけなんです。私はある意味では保守的で懐疑的な人間ということもあるんですけれども、岩崎先生の言われることに疑問を持っている。つまり岩崎先生の、記憶それ自体が語りだす、場という契機を経て記憶それ自体が語りだすという想定ですが、そういう記憶というものを私たちがキャッチできるかという、キャッチできないだろうと実は思っています。私たちが認知可能なものとして出てくる記憶というものは、必ず何かの党派的、イデオロギー的バックがある、そういうふうに私は思います。ある種のイデオロギー的条件によって、これはそういうふうに言明がうながされている、そういう記憶だと私は思います。したがって「手付かずの記憶」という観点に立って、歴史の疎外と言いますか、歴史が記憶を疎外して

いく状況を批判するということは、思想的にはもちろん成り立つと思いますが、現実の歴史学は、そういう何らかの意味でイデオロギー的負荷を帯びた記憶のなかをかき分けて進むしかない、そういうものであろうかと私は思っております。それが第1点です。

第2点は、ノラにとっては自明の前提であるけれども、私たち日本人から見るときわめて特徴的に見える問題を指摘しておきたいと思えます。おそらく国民国家一般が国民的記憶になるものを明示的なロジックで示すとは必ずしも言えないのではないだろうか。この点でフランスはやはり、日本と単純には比較できない。なぜかというフランスは言うまでもなく西ヨーロッパ世界のなかにあるからです。西ヨーロッパ世界にあり、西ヨーロッパ共通のもの、枠組みをさまざまな形で引き受けながら、そのなかでなおかつ自分たちが特徴的で、さらには優越した地位を保っているということを弁証するという、そういう伝統があります。中世から国王のブレーンたちはフランス王国が西ヨーロッパ世界のなかで特別な地位を持つんだということを、彼らなりの歴史的根拠を付与していろいろ説明してきました。それが説得的かどうかはまったく別問題として、共同体のなかであって、共同体の原理の完全な体現者であると同時に独自の個性を持つ、しかも優越する、こういうややこしいことを言うわけです。近代のフランスはこの伝統をそのまま受け継いでいると私は思います。これについてはノラが書

いておりまして、工藤さんの訳を引用しますと「進歩に向けた人類の歩みは、理性の獲得によって実現される。しかるにこの理性の進展の歴史的担い手は国民国家であり、革命期フランスの歴史がそのことの際立った実例をなしている。したがってフランスの歴史は理性の歴史である。」なんだかぜんぜんわかりませんが、こういうロジックがあると。それで自国の国民的、国家的伝統について何らかの明示的ロジックを用いて語るという文化はフランスに強固に根付いて、もちろんイデオログだけではなくて、一般の公衆にまで浸透しております。その結果私のような外国人が歴史的モニュメントに見入っていると、小学校先生がやってきて親切に解説してくれるということになります。そうすると、異議申し立て派というのもそれに対抗してやはりロジックを持ち出さないといけない。そういうことがあるだろうと思えます。

しかしそういうふうには西ヨーロッパのなかでフランスの特異性を肩肘張って言うということが、1970年くらいから、そういう圧力が少し弱まってきたのではないかと。あるいはそういうことはもうナンセンスというか時代遅れということになってきたのではないかと。その変化については西ヨーロッパの共同体としての再建が重要な契機になってきているのではないかと思います。ノラの書物は、そういう変化を踏まえて、いわゆる国民的文化伝統なるものの、生成発展そして一応の解体を見せたんだろ

うと思います。その際国民的文化伝統についてかつて行なわれた雄弁をもう一度聞くだけでも、ある程度この目標は達成されます。なぜなら私たちは、まさにそれが非常に違和感を持って聞こえる地点に来ているからです。いわばアイロニーとしてそういうものを聞くことができるという地点にもう来ているからであります。それが割合おもしろいのですが、多分こういうやり方をやっている、他方で問題もあります。多分こういうやり方をやっている、言葉のない民衆の表象はなかなか見えてこないだろう。ここでとりあげているのはさまざまな意味での言葉をもっている人、外に向かってそれを表現できる人たちの主張であって、そうでない表象の部分はちょっと見えてこないかなと思います。またこういうことを語ることが、ある種のグローバル時代に向けた再編成であるという性格をもつというのは、これはまったく岩崎先生の指摘されるとおりだと思います。

しかしここは日本史とフランス史の対話ということですから、日本史の先生にぜひ教えていただきたいのは、日本における現在の記憶の問題の浮上はいかなる条件から生じてきたものなのかということです。私の印象では前近代日本はフランスのような意味では緊密な、ひとつの世界に緊密に組み込まれていたわけではなくて、それ自体がひとつの小世界であった。そうするとその小世界の中ではみずからの文化伝統について明示的なロジックでかたる必要はないわけです。そこはすべてであるわけで

すから。それが近代国家になったときに日本はどのような必要に迫られてみずからの文化伝統について言説化するのか、あるいはしないのか。またそれはどの程度共有される国民的記憶となるのか。これについてはまた日本史の先生方に教えていただきたいと思います。

最後に現在の歴史学が共通に抱える条件ということを先ほども申しました。これについて私たち全員で考えることが必要なんですけれども、私からとりあえずひとつあげるとすれば、歴史研究者は一般の公衆に向かってどのような形で認識に揺さぶりをかけるようなメッセージを発することができるのかが問われているということです。もしそういうメッセージを発することができないのであれば、歴史学はさまざまな公的な場面から退場させられるかもしれません。こうなってきましたと歴史学は、何か戦略を立てなければいけません。この本はそれを考えて編まれているのでしょうか。それに対してこの本がどれだけ成功しているかはまた別の問題として。とにかく歴史学として何か戦略を立てる必要はあるのではないかというふうに思っております。以上です。

(えがわ) あつし・大阪大学